

総力戦体制下のナショナル・アイデンティティの形成と動揺

一元日本軍人・軍属のオーラル・ヒストリーを中心にー

朴 洗弘

大阪市立大学大学院 文学研究科 人間行動学専攻

社会学専修 前期博士課程2年生

Keywords: 総力戦, 思想戦, 国体, 日本軍, ナショナル・アイデンティティ

1. はじめに

本研究では、元日本軍人・軍属のオーラル・ヒストリーを中心に当時の帝国の民間及び軍隊で実施された思想戦教育の内容を通して国体思想の下で構成されたナショナル・アイデンティティの性格やその形成過程を検討する。これにより、自らの尊厳と生命、倫理観などが脅かされる戦場の極端という極限状況下において個人の意識にどのように作用したのかを捉え、人間の身体だけではなく精神も動員の対象にする総力戦の性格を究明する。その作業を通じて、思想戦が個人の人生に与える影響について論じることができるようになることを期待する。

2. 先行研究

戦争の様相が以前とは異なる総力戦として変わり、戦争を遂行するためには、「一国全体のあらゆる資源—経済的・物質的資源のみならず、知的能力・判断力・管理能力・戦闘意欲を備えた人的資源、さらには、そうした人的資源を情報操作によって制御し得る宣伝能力という新たな資源—を動員」することが必要となった(山之内 2020: 14)。

戦争への全国民規模の動員が前提にされると、「国民という名称」は「敵国および敵国に属するあらゆる人々からは区別され、彼らとは絶対に相いれることのない文化的価値を共有する者、戦争において死の運命を共有する者」を示すようになり、このような「運命共同体」としての「情念を共有しえない者は、非国民として倫理的に糾弾され」る存在になったのである(山之内 2020: 15)。言い換えれば、「死の運命的平等性を前提とする国民主義的イデオロギー」が世俗生活まで支配する「事実上」の「宗教となった」のである(山之内 2020: 15)。

「軍事力だけでなく工業生産力や資源の確保、国土の広さ、科学技術力、対外宣伝力、軍人の市民の精神力など」が「総合的に戦争の行方を決める」総力戦の時代が到来したと判断した日本軍部は、「戦争遂行に寄与する軍人や市民の精神力の維持と、対外宣伝の両方を含む思想戦」を重視するようになった(山崎 2019: 141)。日本軍は思想戦の類型を「敵国に対する宣伝」、「中立国に対する宣伝」、「自国民に対する宣伝」など三つに分け、方法としては「新聞その他の言論機関の利用、ビラの撒布、電報の利用、ポスター、活動写真の利用、その他情報の

発表、人と人との接触による対話、演説、示威運動など」を提示した(山崎 2019: 142)。

大戦期の日本社会と軍隊の思想領域の核心を構成したのが「国体」思想である。明治新政府は西欧文明の精神的根幹となった一神教のキリスト教の役割を日本で遂行する国家宗教として天皇を頂点とする国家神道を構想した。ここで「国体とは神々以来けっして絶えることのなかった一系の天子の家系を中心として、その家系に対する信仰をその中核としてもつものとして理解するように」なり、その信仰は「日本における最も古い書物でいまだ残っている」『古事記』などにより裏付けられた(鶴見 1982: 44)。

3. 調査概要

Facebook、言論社、知り合いの紹介などを通じて旧日本軍出身者及びその関係者を探し、3名(Aさん、Bさん、Cさん)と対面インタビューを実施した。Aさん(1921年生、最終階級: 中尉)は学徒出陣で海軍兵科予備学生として入隊、海軍陸戦隊の将校として中国の海南島で勤務した方である。Bさん(1925年生、最終階級: 一等兵曹)は海軍飛行予科練習生に志願、通信兵として香取海軍航空基地で勤務した方である。Cさん(1926年生、工員)は川西戦闘機という軍需企業に所属され鶴野海軍航空基地で勤務した方である。

AさんとBさんを対象としたインタビューはAさんとBさんが住んでいる家で各2回に渡って実施し、インタビュー時間はそれぞれ5時間から6時間に至った。Cさんを対象としたインタビューはCさんが戦時期に務めていた海軍飛行場で1回1時間行った。インタビューの形式は事前に構想した質問を基盤とした半構造化形式であり、許可を得た上でインタビューの内容を録音し文字化したものを考察した。

4. まとめ

国体思想を基盤とするナショナル・アイデンティティの形成過程は、国民という意識を形づくった。こうした意識は、調査対象者たちの戦争体験の中で強力な影響を及ぼし、軍への志願や玉砕へ覚悟など様々な決断を引き起こした。しかし、彼らのナショナル・アイデンティティは戦争が強要する極端な状況の中で揺れるようになり、敗戦の局面では崩れる場面もあった。国体思想がついには動揺を余儀なくされた調査対象者たちの事例から、総力戦体制下の思想戦は個人の意識に影響を及ぼす側面を持つ一方で限界点も含んでいると評価できる。その限界にもかかわらず、戦争中に内面化した思想の痕跡が調査対象者たちの生涯全般において依然として現れることから、近代国家における教育や思想戦の位置付けについての示唆となる点を見出すことができると考える。

参考文献

- 鶴見俊輔, 1982, 『戦時期日本の精神史』岩波書店.
- 山之内靖, 2020, 『総力戦』ちくま学芸文庫.
- 山崎雅弘, 2019, 『歴史戦と思想戦』朝日新聞出版.